発行：　アジア子ども文庫
メールアドレス　Lfacjimukyoku@aol.com
ファックス　1022-81-64-288-1658
本部事務局代表　景山あき子
フィリピン事務局　祐川郁生
タイ事務局　Porn-Anong Niyomka
翻訳チーム代表　シスターロルナ
顧問　松居　直
会計　桜田方子
世話人　松居　友

風の便り

愛の言葉を伝えるために

顧問　松居　直

言葉は生きる力です。ゆたかな気持も言葉が育てます。言葉が愛なのですが、現代は言葉が武器として使われることがあります。

アジア子ども文庫は、愛の言葉を子どもたちに贈るために活動をはじめました。そのため世界の縮図のような混乱が支配する、ミンダナオの地から始まったのです。この活動は援助や支援でなく、現地の人々や子どもの自立が目的です。特に子どもの成長を支え、学びのための基礎となる言葉や好奇心や協力を養い育てるための、語りと読書の場である家庭文庫と移動図書館を、現地の人々と共に運営しています。

そのためには現地の言葉を大切にしなければなりません。生きる力は土地の言葉にかかっているからです。言葉を尊重することは、人を大切にし、未来をひらくことです。子どもの幸せは、次の世代の希望と幸福と平和の光です。ミンダナオの子が光の子でありまっすように、心から願っています。

テロの中に子ども文庫を

アジア子ども文庫が出来たのは去年のことです。これは絵本を見たこともない貧しい地域の子どもたちの住む村に家庭文庫を作っていこうという運動です。今年からフィリピンではじめましたが、来年にはタイにも拠点を置く予定です。将来はマレーシアかインドネシアでも始めたいと思っています、というのも最近は宗教的対立から、不幸な出来事が世界中で起こっているので、せめて子どもの本の世界では、若い人たちや子どもたちが、国や宗教を越えて喜びや感動を分かちあうことが出来たなら良いなという思いからです。

具体的にしていることはささやかなことで、奨学金を受けている高校生や大学生たちと、まずは車に絵本をたくさん積んで小さな村に読み聞かせに行きます。これが実に楽しいのですが、村について読み聞かせをはじめると、あれよあれよという間に小さな広場は子どもたちでいっぱいになってしまいます。いったいどこからこんなに大勢の子どもたちがわき出てきたのだろうかと不思議に思うぐらいです。

絵本など見たこともない子どもたちですから、目を皿のように見開いて、ボランティアのお姉さん、お兄さんの絵本の読み聞かせや語りを聞いています。

ミンダナオの子どもたちの日常言語はビサヤ語が多いのですが、学校で使うことは禁止されています。政府が国語であるタガログ語と英語をしゃべる

ように指導しているからです。ですからフィリピンで売っている絵本は９０パーセントが英米で出版されている英語の絵本で、あとはタガログ語の本がわずかにあるだけです。フィリピン人の半数近くはビサヤ語をしゃべっているのに、ビサヤ語の本は書店にはまったくありません。

加えて、貧しい村の子どもたちは教育も行き届いていませんから、国語のタガログ語すら理解できない事も多い、小さな子ならなおさらです。そこで絵本の読み聞かせのために、ボランティアの奨学生たちは、あらかじめ英語やタガログ語の絵本を現地語に翻訳して練習しそれから現地で語っていきます。

初期の目的は、本のおもしろさに目を開いてもらうことです。あちらこちらの村を巡ると、やがて絵本好きでしかも地域の向上に貢献している村人の家がわかってきます。そこで次の段階は、その少し大きめの家に本棚と本を寄付して家庭文庫を作ってあげて、地元の子どもたちに解放してもらうことです。絵本だけではなくて、辞書や百科事典も置きます。といいますのも、鉛筆一本買えない地域では、教科書も五人に一冊といった割合で使っていることが多く、まして辞書などあろうはずがありません。

このようにして、貧しい村々に家庭文庫を作っていくのが活動のメインなのですが、一方で日本での活動も始まっています。ボランティアが集まって現地語の翻訳を付けて送る作業です。この作業に関心のある方や、日本の良い絵本を寄贈してくださる方々は、浦和の行田カトリック教会にいらっしゃるフィリピン人のシスター・ロルナに連絡してください。活動の主な目的は、豊かな日本の物資（絵本）を援助するというだけではなく、翻訳作業を通じてたくさん働きに来ているアジアの人々との交友を深めることです。

今年の春まで、松居友は現地語のビサヤ語を学び、その後特別予算で車を購入してスタッフとともに移動図書館をはじめました。フィリピンのなかでもミンダナオは特別に貧しく紛争も多い地域です。プラスティックのカゴにたくさんの本を入れて運び、現地ではゴザをしいて読み聞かせをするというとてもシンプルなものですが、子どもたちの反応はすばらしいものでした。

日本人はあくまでもおもてに出ず、荷運びや本の整理にてっして当時国のスタッフたちが創意工夫を重ねていくようにしました。といいますのも、現地の若者たちが読み聞かせの楽しさを知り、自発的に活動を行っていくことが大事だからです。

７月には、マニラでPBBY（フィリピン児童図書評議会）の大会があり、アジア子ども文庫のタイ支部代表を引き受けてくださっているタイの編集者、ポンアノンさんが招待されマニラの子ども博物館とフィリピン大学で講演されました。松居友も講演をしましたが、来年は１０周年記念大会で、ＬＦＡＣ顧問松居直が講演する予定です。ミンダナオでの仕事が一段落しましたら、来年はタイに文庫をおく活動を始める予定にしています。将来は、タイの若者とフィリピンの若者、将来的にはアジアの若者たちが互いに交流することができれば幸いだと思っています。

フィリピンではキダパワンに事務所もでき、奨学生や孤児たち数人と生活しながら現在活動をしています。まだ始めて一年あまりの活動ですが、とても評判が良く読み聞かせの注文は引っ張りだこです。なかでも思い出深いのはモスリムの人々に絵本を寄贈したことと、彼らの村を訪れた経験でしょうか。ＭＩＬＦの将軍もお礼に来ました

し、読み聞かせが終わってイスラム教の子どもたちとキリスト教の子どもたちが、ともにバレーボールをして遊んだりしている姿には心を打つものがありました。

時には海辺の村、時には山間の村、モスリムの村、先住民族の村、テロの憎しみや貧富の差を超えて私たちはこれからも、現地の若者たちと共にこれらの村を訪れて、貧しい子どもたちに絵本の読み聞かせを進め、出来る限りたくさんの家庭文庫を作っていきたいと思います。

活動に賛同してくださる方は住所氏名を明記されて口座に郵便振り込みで寄付をおよせください。

郵便振替口座番号　００１１０　８　５２３３１

加入者名　『アジア子ども文庫』

年三回活動報告と共に、『風の便り』をお送りいたします。また浦和の行田カトリック教会では、翻訳ボランティアを受け入れています。すべてのお問い合わせはメールかファックスでお願いします。

メールアドレス　Lfacjimukyoku@aol.com

ファックス　1022-81-64-288-1658

スタッフ紹介１・ドンドン

貧乏は人生の障害にはならない

ぼくの名前は、ドンドン、１７歳。妹は１６歳、弟は１５歳ですが一度も学校へ行ったことがありません、妹も小学校を卒業することができませんでした。とても貧しかったからです。ぼくだけ小学校と高校を卒業できたのは、長男としてベストをつくしてがんばったことと神の恵みによるものだと思います。

両親は、ぼくが小さい頃に離婚しました。母も父も子どから去っていきました。それでも神さまは、数々の試練にもかかわらず、ぼくに勉強を続ける機会をあたえてくださいました。

ぼくが勉強を最後までやりとげようと思ったのは、貧乏が決して人生の障害にはならないことを証明したかったからです。成功することで、親戚だけが仕事の機会をあたえてくれる唯一の人ではないことを証明したいのです。なぜなら豊かな家庭の人たちは、ぼくらのような貧しい人間を見下しているからです。

両親が離婚してから、ぼくと弟は祖母のところにあずけられ、妹は叔母の所にいきました。しかし、洗濯女をしていた祖母には、とてもぼくら二人を養っていけるような経済的な力がなかったので、ぼくは曾祖母のところにやられました。

曾祖母のところでぼくは二年間過ごし、その後ふたたび祖母に引き取られ、今度は学校の先生をしていらしたオマパ夫妻のところにあずけられ、はじめて学校に行かせてもらうことになりました。学校に行けることになった時はとてもうれしかった。

でも数ヶ月したとき、担任の先生がいくつかの宿題を出していかれました。そこでぼくは、オマパス氏に必要な物を買っていただくようにお願いしたのですが、たいして重要でもないものにお金を使うとは何事だ、と言ってたくさんの人たちの前で怒られました。それいらい怖くなって、言うことはすべて受け入れて従うことにして、人生にチャレンジしていく事だけに気持を向けるようにしました。結局、オマパス氏の家には小学校2年から高校1年まで置いていただき、孤児ゆえに自分を犠牲にして堪えしのぶ気持ちで生きてきました。

その後もさまざまなことが、ぼくの人生に起こったのですが、たとえ孤児であったとしても、友だちと学校生活を楽しく過ごすことができたのは、ぼくの友だち好きな性格によるものだと思います。

小学校一年の時に、ぼくはクラスで一等賞をとりました。2年生の時は9番目

でしたが、ジャンボリーのキャンペーンに参加して賞金を獲得しました。3年生の時は、メダルはありませんでしたが、カブスカウトのメダルをもらいました。それに、学級委員長に選ばれました。友だちの話だとぼくがとても積極的な性格だったからだそうです。それから記念祭の学芸会では、ダンスを踊って優勝しました。ぼくも友だちもその日は絶好調だったから。

　そのあと飛び級試験を受けました。学校に行けなくて、他の人たちより2年間遅れていましたから。試験の結果はメダルの授与のあとに行われます。その時のメダルはふたたび一等賞、その後に校長先生が試験結果を発表されました。なんと合格です！ほんとうにうれしかった、これで飛び級で小学校4年生からいっきょに高校一年生になれたのですから。

　高校一年の時は、その年の最高の踊り手（ダンスオブザイヤー）に選ばれて、伝統的なモスリムダンスであるダヤンダヤンを皆に教える役目をはたしましたし、ダンスグループにも入りました。翌年はバンバド公立高校に移り、そこで伝統的な踊りと同時にストリートダンスやポップダンスも学びました。

　ダンスをしているとき、ぼくはとても幸せです。一番好きな趣味ですし、何といっても幼いときに母さんが教えてくれたのがダンスだったのですから。母さんは子どものぼくをディスコに連れて行くと、あなたがじょうずな踊り手になったらとってもうれしいわ、と言っていましたし、その夢が実現し始めたのです。それに、踊っていると、母

さんのことを思い出すし、母さんがこそがぼくのダンスの発想の泉なのです。悲しいときでも、ダンスをすれば楽しくなれるし、いろいろな悩みを忘れられるし、たとえ問題を抱えていても幸せになれるのです。

　あっという間に高校4年間が終りに近づいて（フィリピンでは中学がなく、小学校6年間の後、高校が4年ある）、休み中に職を探しに叔母のところに行きました。そこでペンキ塗りの仕事に就き、収入はみな叔母にわたしました。なぜなら彼女の家庭もぼく同様に崩壊した家庭だったからです。叔母は母の妹でしたから、ぼくは本当の母のように思い接したのです。でも叔母は、ぼくがお金を持ってきたときにだけ母のようにふるまうので、ぼくに必要なのは愛し気にかけてもらうことだけ、と話したのですが、理解してもらえず、そんなに不満ならこの家から出ていくがいい、と怒って、ぼくはとうとう叔母の家を出ることになりました。その後、ジョアンのおばさんの家に行ったのです。

　ジョアンは、わたしが奨学金を出してくれる神父さんを見つけてあげるから、大学に行く夢を捨てないで、と言ってくれました。そして、祐川神父さんにぼくのことを話したのです。神父さんはちょうど奨学生の受け入れを始めていたところでしたから、2002年8月3日に会って受け入れを同意してくださいました。そして、10日にはイースターヴィレッジの家に来たのです。

　ぼくは、プロの編集者か作家にいつかなりたい、そのための仕事も始めました。今ぼくは編集者見習いをしています。この地域の先住民族に伝わっている民話の収集がぼくの担当です。後期から、ぼくは大学に行きはじめます。日本の子どもたちもお小遣いのなかから送って下さっているという経済的な支援に感謝します。主の祝福が皆さんの上にありますように。

スタッフ紹介2・ボボンの昔話

不思議な場所の物語

これぞ、寂しくも静かな場所の常ならざる物語で、ほとんど知られていないふしぎな土地の言い伝え。そこではたくさんのおかしな出来事がおこっているとのうわさ。

とある日のこと、父と子がその不思議な土地に入っていった。というのも噂によると、そこにはふだんは見ることがないめずらしい草が育ち、たくさんの美しい花が咲き、とてもきれい場所であるという。そのうえに、二人ともたいそう水あび好きで、どうしても彼の地で水をあびたくてたまらなくなったのだ。

そうしたわけでずんずんわけ入っていくと、その山のすそにたどりつくなり子どもの目に、かがやく金に包まれた大きな木がはえているのが目に入った。そこで子どもは、父親の手を引くと、不思議な木に向かって歩きだしたが、子どもには確かにそれが見えるのだが、父には見えない。

父親は、子がとりつかれたように、山奥にむかって歩いていこうとするので心配になって、なぜそちらに行こうとするのかとたずねると、子どもは、自分には幹も枝も金で出来ている大きな木が見えるよ、という。しかし、父親にはどうしてもそれが見えない。

そこで、父さんには何も見えないが、と言うと、ほらまっすぐ向こうの方だよ、と子どもは言う。そこで、二人はそちらに向かって歩いて行くと、いろとりどりの花が咲き、たくさんの蝶が飛びまわり、小鳥たちがさえずって、そこはなんとも美しいところだった。

二人はすっかり楽しいくなって、どこまで来たのかも考えず、あちらこちらをながめながら歩いていると、とうとう日が暮れはじめた。そこで父親が、さてもう帰ろう、と言ったのだが、そのときには、すっかり帰り道を思い出すことができなくなっていた。

こうなると歩くにも歩かれず、ほとほと困りはてて、さてどうしたら家へ帰れるものかととほうにくれながらしばらくすわって話している

と、子どもの耳にふしぎな声が聞こえてきたが、それはどうやら、女の声らしかった。

父さんほら女の声が聞こえてくるよ、と子どもが言うのだが、なぜか父には聞こえない。はて、自分には聞こえないのに、子どもには聞こえるというのもおかしなものだ、とさしもの父も怖くなって、いったいどこから声が聞こえてくるのか、とたずねると、ほらほらあの木だよ、ぜんぶ金でできた木からだよ、ほんとだよ、と言う。

そこで二人は木に向かって歩きはじめると、そばで来たときに、ほんとうに父の目にも大きな木が見えてきた。金がびっしりと枝につき、幹も枝も輝いてその美しいこと。びっくりして立ち止まりながめていると、とつぜん背すじがこおるような風が吹いてきて、ぞっと髪の毛がさかだった。つめたい風にふかれて、二人が怖くなってふるえていると、木の中から出てくるものがいた。

それは全身にすきとおるような白い衣をまとった女で、出て来るなり、わたしは白い女の妖精です、と名のったので、父と子はこわくなって逃げようとした。ところが、木からはなれようとすればするほど、なぜか木に近づいてゆき、あれよあれよという間に木に吸いこまれて消えてしまった。妖精の家だったのである。

これぞ、寂しくも静かな場所の常ならざる物語で、ほとんど知られていないふしぎな土地の言い伝え。何者であろうとも、彼の地に入ったものでもどったものはいず、帰ったものはいないということ、ということは、どうやら死んだものと思われているが、だれもわからない。

１９歳のボボンは天才的なストーリィテラー、バゴボ族の首領であった亡き父親から聞いた昔話を語る。ボクシングのチャンピオンで絵本を出すのが夢。

スタッフ紹介３　ギンギン

１５歳、高校２年。
ギンギンのお父さんはＮＰＡの闘志として、貧しい人のために闘ったけれども殺されてしまった。
お母さんも死んでしまった。誤解から親戚からも見離され、妹と涙の分かれをして一人キダパワンに出て来た時、キンキンは１４歳だった。働いてお金が出来たら、殺された父さんのお墓を作るの。

ギンギンの集めたミンダナオの迷信

１，死人が出たら掃除をするな、髪をすくな、水浴びするな、もしそんなことをしたら次にお前が死ぬだろう。

２，夜になったら髪をすくな、シラミがふえるぞ！

３，夜に質問されて、答えに窮すると、妖精が代わりに答えることがあるから気をつけろ。

４，息子が自分の足の親指をしゃぶっているのは、妹か弟が欲しい証拠。

５，虹を見て指さすと、指がちょん切れる。

６，雷鳴がとどろいたり、稲光が走ったら笑うなよ、歯が抜けるぞ。

７，夜に掃除をするときは、ホコリやゴミを外に捨てるな、幸運までも掃き捨てられる。

８，死者の日（ハローウィン）には、釘を打つな、うるさい！っと言って死人が蘇るから。

９，満月の夜には、妖怪や吸血鬼や化け物たちがうろつき回るから気をつけろ。

１０，夜にかくれんぼをしたら、妖精につれさられるよ。

１１，出かけるときには必ず十字を切りなさい、忘れるとアクシデントに見まわれるよ。

１２，夜に爪を切ったりすると、家族や親戚に災いがふりかかるぞ。

１３，夜に大工仕事をする人は、自分の棺桶を作っている。

１４，髪がぬれたまま寝ると盲目になるよ。

１５，食べた後にあくびやのびをすると、幸運がさっていく。

１６，双子のバナナを食べると、双子が生まれる。

１８，台所に入ってすわる人は、やもめと結婚するだろう。

１９，白いちょうちょは、富をもたらす。

レイセルのレシピ

ラポラポの煮付け

スタッフ紹介４，レイセル

ラポラポ（和名ハタ）
ペッチャイ（野菜パクチョイ）
タングラッド（香草）
カマティス（トマト）
アシン（塩）
ロイア（ショウガ）
シブヤス（ねぎ）
ヴィチェン（調味料）
トゥヴィク（水）

この料理はとてもシンプルなものです。
次のように料理します。
最初にナベに水を沸騰させます。煮たった水に塩を少し入れます。次にショウガ、香草、トマトを入れてさらにしばらく沸騰させた後にスライスした魚を入れます。
ほどよく煮えたところでパクチョイとねぎを入れ、好みによって調味料を加えてください。
最後に、塩や調味料が足りないと思ったら、好みに応じて適度に加えてできあがりです。
あつあつのところを食卓に出して、冷めないうちに食べましょう。

親友のエープリルと市場でタングラッド（香草）を買う

本来は大学を卒業しているはずの１９歳。現在は高校３年生。貧しさゆえに１３歳でお手伝いさんに出ていらい、さびしさ、孤独、ご主人に仕える身として本当にいろいろなことがあった。とにかく自由に世界に羽ばたいて、いろいろな友だちを作りたい、と言うのが夢。料理が得意で、長く独学で日本語を勉強してきた。

スタッフ紹介５・エープリル

エープリルの童歌

エープリル１７歳。イエスが死んだとされる聖金曜日の夜。死を告げる鐘の音とともに生まれる。幼いころより、つねに愛から見捨てられる体験をしながら育つ。現在、高校２年生。
これは、母から見離されて山の親戚で育ったときに、従姉妹が歌ってくれた童歌。

わたしの　とうさん　うんてんしゅ
まいにち　うんてん
だから　ポット　ポット　ポット

わたしのかあさん　せんたくおんな
まいにち　せんたく
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ

わたしの　おとうと　たべざかり
いつも　たべてる
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ、　ヤム　ヤム

わたしの　いもうと　でんわずき
いつも　もしもし
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ、　ヤム　ヤム、　テレテレ　バーバー

わたしの　うばは　にほんじん
にほんご　じょうず
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ、　ヤム　ヤム、　テレテレ　バーバー、
アリガト　アリガト

わたしの　ばあちゃん　ほおけてる
ほおけた　ばあちゃん
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ、　ヤム　ヤム、　テレテレ　バーバー、
アリガト　アリガト、　ボバ

わたしの　じいちゃん　ころしやかぎょう
ころしや　じいちゃん
だから　ポット　ポット　ポット、　チェキ　チェキ、　ヤム　ヤム、　テレテレ　バーバー、
アリガト　アリガト、　ボバ、　バーン！